

ラジオ体操と国民国家

山下大厚（法政大学）

はじめに

本発表では、いくつかのラジオ体操に関する先行研究^{注1}に学びながら、ラジオ体操が、ラジオというメディア・テクノロジーを介して、「国民」という主体を形成し、人々に自らを管理させる国家的な装置の一つとして果たした役割について検討したい。

すでにいくつかの先行研究によれば、近代日本国家は、毎日正確にくり返されるラジオ放送によって、人々の時間意識の近代化をはかりながら、時計が刻む普遍的な時間の流れに従わせていったのである。そしてまた、放送によって全国一律に人々の身体を動作させることによって個々人の身体を集団化し、「国民」の身体として、考え、行動するものとして規律化する装置として、ラジオ体操を用いたとされる。

ここでは、そうした見解をふまえつつ、より人々の内面にいくこむかたちで、自らを監視し管理する装置として作動する“ラジオ体操”の仕掛けについて検討を加える。

ラジオの近代

ラジオ放送は、そもそもそれ自体「集権的統制機構^{注2}」として誕生したわけではない。その黎明期には多くのアマチュア無線家たちが自由に電波を送受信していたのであって、ラジオ放送の技術それ自体は、双方向的で、中心のないものとなる可能性を持っていたのである。

しかし、ラジオ放送の社会的影響力に気付いた通信省は、これをすぐさま国家統制下に置き、大正15年（1926）「社団法人日本放送協会」を設立することによって、全国一元的な放送網を実現するのである。これにより人々が自由に電波を送信する自由は失われ、厳しく統制されたものだけが送信を許され、人々はもっぱらそれを受信するのみとなった。

こうして日本のラジオ放送は、国家のメディアとして明確に規定された。かくて、ラジオ放送は、毎日近代的な時間の流れに沿って刻まれた一元的な放送を、上から下々へ向けて、領土のすみずみまで届かせることによって、集権的かつ均質な国家空間を構築することに寄与したのであった。

また、ラジオ電波が運ぶ音声やコンテンツは、公共空間よりもむしろ私領域にこそ入り込んでいったと言わねばならないだろう。まだ労働や学校の始まらない早朝の時間帯や、家の中に、送信された電波によって送り込まれたラジオの音声は、私領域を侵食し、人々を国家的共時性の中に組み込み、国民化することに寄与したのであった。

ラジオ体操のはじまり

ラジオ体操は、アメリカのメトロポリタン生命保険が、保険加入者の健康増進・死亡率低下を目的として、大正14年（1925）から始めたラジオの広告放送の体操をヒントにしたものである。通信省がこれを国内に紹介したのをきっかけに、簡易保険加入者の健康増進を目的とした「国民保健体操」として具体化したのであった。通信省簡易保健局は日本放送協会の賛同を得、ラジオ体操の放送は、昭和3年（1928）に昭和天皇即位の御大典記念事業の一つとして開始されたのである。

天皇のまなざし、近代の視覚的支配

近代の天皇は、明治期にさかんに行われた巡幸によって、それまで天皇の存在を意識しなかった周縁にまでくまなく視察を行い、国民の前に可視的な求心的存在として現れたのであった。また、巡幸を行わなくなった後も、さまざまな国家的ページェントにおいて国民の眼差しの下にその姿を現すと同時に、国民すべてを分け隔てなく見渡し、視覚的に支配する眼差す存在として自らを示したのであった。かくて、天皇と国民のあいだには、眼差し、眼差されるという視覚的支配関係が成立したとされる。

たとえば、T・フジタニによれば、「明治期全体を通じて最大の軍事的スペクタクルであった^{注3}」明治39年（1906）の凱旋観兵式は、膨大な群衆と途方もない軍勢力が天皇の目の前に実際に集結させられる必要があったのである。

しかし、ラジオ体操は、もはや大仰なページェントを行うことなく、そのメディア・テクノロジーによって、規律・訓練される国民の身体を齊一的に可視化し、天覧に供することを可

注1 稲垣正浩 1994 「ラジオ体操の『ふるさと』＝国民国家」『三省堂ぶつくれつ』109号 所収 三省堂宣伝部、黒田 勇 1997 「体育をめぐるwhy③ ラジオ体操」『ちいさい・おおきい・よわい・つよい』No.16 所収 ジャパンマシニスト社、高橋秀実 1998 『素晴らしきラジオ体操』小学館

注2 吉見俊哉 1995 『「声」の資本主義 電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社選書メチエ p.211

注3 T・フジタニ 1994 『天皇のページェント 近代日本の歴史民族誌から』日本放送出版協会 p.149

能にしたのである。「此の運動は全国幾千万人の人々が同じ心を以て、同じ時刻に同じ運動を全く一斉に実行するのである。注4」

すなわち、天皇はもはや、実際にその姿を国民の前に現す必要はなく、また、国民ももはや、群衆となって天皇の視線の下に集まらなくとも、めいめい自分の都合の良い場所で電波を受信し、ラジオによって送信される音楽と号令によって、全国同時にラジオ体操を行うことによって、不可視で超越的な天皇の眼差しにその身体を差し出し、可視化され、規律化されることを可能にしたのであった。

だが、ラジオに媒介されることによって、いやおうなく生じる物理的距離感が、この視覚的な支配従属関係を疎外することがなかったのだろうか。おそらくそれを埋め合わせたのは、ラジオ体操の放送が常にライブであったことではないだろうか。「あの体操指導のアナウンサーの朗らかな声での朝の挨拶、『小学校の皆さん！御早う御座います』この時全校児童は声を合わせて元氣よく、『御早う御座います』と返しの挨拶をする。目には見えない。けれども心に通うとも云えるこの挨拶。注5」こうした交歓が存在しなければ、ラジオ体操の仕掛けは作動することはなかったであろう。

「ラジオ体操も実にラジオによって、始められたもので、ラジオでなくては到底今日の如き全国民的な偉大な興隆は望めない。ラジオは距離と時間を超越し、その威力は全く世紀の驚異である。ラジオ体操の号令は一瞬にして全国一億の同胞は勿論、樺太、満州、台湾、朝鮮の人々をも一斉に手を振り足をあげて運動せしめる。注6」とあるように、ラジオのライブ放送であることのアウラが、ラジオ体操に参加する人々の連帯感を生んだのである。つまり、今ここで「全国一億の同胞」と共に体操をしているという感覚が、国民国家の一員であることを人々に発見させ、定着させる働きをしたのである。そしてまた、「毎朝体操開始前に整列して皇居の遥拝を唯の一日として欠か^{注7}」す事なく、毎日くりかえされるものでもあったのだ。

内面の自己監視と主体化

昭和6年（1931）には、ラジオ体操を組織的に発展させるため、「ラジオ体操の会」が発足。

夏休みの8月1日から20日までを「ラジオ体操実施期間」に定め、出席カードの配付を開始したという。この出席カードは、「小学校の夏休みの日記のように、あらかじめ教師によって承認された予定と、実際の暮らしとのズレを、あからさまに自己監視させる装置として注8」働いていたことはいうまでもない。

そしてそれ以上に、ラジオ体操は多くの人々に、己の身体を、その病める部分を、内面から見つめさせ、自らの身体の状態や健康状態を、告白という形式において、語らせたのである。「それによって個人が自分を理解し、自分の身体を一つの総体として手に入れ、自己の同一性（についての意識）を確立する媒体として作用注9」したのであった。

例えば、麴町に住む男子中学生はラジオ体操感想文の中で、「ラジオ体操は僕にとって最も良き恩人であり、又僕の健康の親であります。僕がこの体操を始めてから最早一年が経つて終わりましたが、此の間の僕の健康状態が如何に変つて行つたかをお話しようと思います。僕の一年前はとても弱々しい人間でした。当時僕は四年生でした。痩せた腕、気持悪く突き出して居る頤、いつも――蒼い顔をしては学校に通つて居りました。注10」と告白する。他にもこうした感想文において、便通が改善した、食が進むようになった、安眠できるようになった、血色が良くなった、ヒステリーが軽くなったなどという身体の領域に属した経験が、ラジオ体操の参加を通じて、己の身体の裡なる変化の真実としてさかんに語られたのである。

かくて、「私」の念願たる身体健康と幸福が、国民体位の向上と国家奉公に連動しながら、「私」の裡なる身体感覚の告白をつうじて、「私」は「国民」=主体として現れるのである。ここではすでに人々は、ラジオの電波によって他律的に動員され、規律・訓練される客体ではない。自己の身体を、監視と自戒の眼差しをもって凝視する内面をもった主体なのである。

謝辞

本発表の内容は、私の指導教授である横山浩司先生の育児日記に関する研究に多くの示唆を与えられました。

以上

注4 日本放送協会 1939 『ラジオ体操感想文集 ラジオ体操放送開始十周年記念』日本放送協会出版協会 p.6

注5 日本放送協会 1939 同書 p.24

注6 日本放送協会 1939 同書 p.3

注7 日本放送協会 1939 同書 p.24

注8 横山浩司 1994 「社会的装置としての育児日記」『社会臨床雑誌』1994年1月31日第1巻第3号 所収 日本社会臨床学会

注9 内田隆三 1990 講談社現代新書『ミシェル・フーコー』講談社 p.183

注10 簡易保険局 1930 『国民保健体操を語る』p.129

参考文献

粉川哲夫編 1983 『これが自由ラジオだ』晶文社

簡易保健局 1929 『国民保健体操講演集〔一〕』

簡易保健局 1930 『国民保健体操講演集〔二〕』

簡易保健局 1930 『保健叢書』